



シモマッチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 盛岡中央高校附属中学校副校長

第21回

女性の社会進出とその根っ子

□ 同窓会での話から

岩手県立花巻北高校の校長時代の役目の一つに、同窓会の集まりに出席するというものがありました。何しろ、県内外25もの支部があるので、全支部に顔を出し、学校説明を行い、時には講演を行ったりするわけですので、それは大変ではあります。

ですが、そのような会合に参加することで、同窓生の多くの先達から貴重なお話をうかがうことができるのは大変ありがたいことでもあります。

建学の精神について侃々諤々と語られることもあります。時には、大瀧詠一と花巻北高時代同じクラスだった方が、当時の彼のことを熱く語ったり。花北からオリンピック選手が生まれた時は我が事のように皆で祝ったり。ASMSAというアメリカの高校と姉妹校を締結した際は、物心両面から多くの支援をいただいたこともありました。また、関西支部では、会長が宗教学者として名高い山折哲雄先生なので、参加して先生と対話ができるのは役得だなあと思

ってもしました。

さて、そのような中から、今回は、当時の東京支部会長であった小原之夫氏とお話したときのことを記したいと思います。小原氏は、花巻北高校から現役で東大に合格したはじめての方で、富士銀行取締役口ンドン支店長、みずほホールディングス取締役副社長などを歴任され、現在はシンクタンクのメンバーとして、企業などに様々な提言を行っておられる方です。その小原氏から、ある会合で、女性の社会進出に関してお話をうかがったことがありました。

現在、企業や学校などでも、女性の積極的な登用が叫ばれていますが、彼は、それは単に優れた女性を採用したり、要職に就けることではなく、それに伴って起こり得る様々な問題への解決も含んで初めて意味をなすといわれました。つまり、女性を採用するということは、それに応じて起こり得る「出産」「育児」などの事象を、当然想定されるものとして管理者側は業務体制をつくるのが必然であるということなんです。だから、結婚退社や出産などを恐れ

て、女性をポストにあえて就けないということは、企業の見識としてあってはならないと彼は言われるのです。

私は、小原氏の話を聞いて、いまさらながら目から鱗が落ちた思いをしました。

□ 夢のある学校改革へつなげるために

学校現場において女性教員は多い。でも、出産によって休職するという事態が発生すると、泥縄式に講師の任用を県に依頼し、そして誰も見つからないとなると、現場で何とか対応する方向で代替教員探しが進められていきます。

このようなことが常態化する中で、女性が「自分が他の職員に迷惑をかけている」という気持ちになったり、管理職が「危機対応として、女性をポストに就けない」といった時代錯誤なことを言い出すという状況もいまだに見られるわけです。

小原氏の話は、マネジメントの根本的視点であり、そしてそれは、「女性の社会進出」という文脈にとどまらないものである

と私は受け取りました。例えば、教師の主體的な研修の支援、あるいは突発的な職場の危機や、精神疾患による病休者が生じた場合の対応等々。もっと言えば本質的な働き方改革と言ってもいいかと思います。

つまり、そのようなバックアップ体制とは、危機対応という受動的なものではなく、もっと戦略的で希望に満ちたものであり、結果として企業や社会全体の在り方を変えていくイノベーションになりうるものではないかと私は感じたのです。

彼と話していて、その時浮かんだアイデアは、例えば、産休や育児休業などが起きた場合、すぐにその現場に配置されるような、学校をまたぐ人材を常に地域の中に置くといった、戦略的な人材バンクシステムの構築です。地域の教育センターや教育事務所の役割の一つとしてこのようなことはできないものか。

また、指導教諭や大学院派遣教員などの役割はどうなっているのでしょうか。彼らを、学校を超えて、地域の中で活用する存在として位置付けることは不可能でしょう

か。

あるいは、指導主事の現場配置も考えられます。指導主事は、管理職へのキャリアパスなどではなく、つねに現場と行き来し、授業改善や学校改革を行う当事者たるものが、あるべき姿のような気がします。どうでしょう。

また、職場環境・学校空間を劇的に変えるというアイデアもあります。職場のデスクを定位置とせず、テクノロジーを用いた遠隔での授業や、学校が持つ垣根やヨロイを取り払って、多様な人々が交わる学びのコミュニティを創造するなど。そんな夢のある学校改革をそろそろ真剣に語りたい。

私は、小原氏の話をつながいながら、力を持ったリーダーたる人物が、このような、真つ当なことを口にすることで、企業や社会が変わっていくのではないかとしみじみと思ったのです。そして、私も、元管理職の端くれとして、こんなささやかなつばやきであっても、思いを発信していくことに意味があるかもしれないと思うこの頃であります。